

「焦燥のファルセー カルメンとホセー」

登場人物表

カルメン
ホセ
大尉
モラレス
エスカミーリョ

フラスキータ
メルセデス
レメンダッド
ランカイエ

あらすじ

それまで定住せず国から国へと移住生活をしていたジプシーを定住させ安い労働力として使用しようとする政府の方針だが、彼らの職場では喧嘩が絶えない。ある日、大勢の観衆の前で喧嘩の仲裁をしたホセ、その時喧嘩を売られていたのはカルメンだった。都市から異動してきた大尉を案内するために行った居酒屋で、ホセはカルメンと会い、また会う約束をする。

それから3年、ホセは隊を去り、カルメンが家族同然だと言う仲間たちと一緒に密輸団を率いるようになっていた。山中の隠れ処にかつての友人モラレスが訪れた。レメンダッドとランカイエは、ホセが昔の軍人仲間と会っていたこと、母親が危篤なので、帰るよう促されていたことを聞いたカルメンは、ホセに銃を突きつけ、帰るよう促す。ホセは大切な鍵をカルメンに預けて1日だけ帰ることにする。ホセが帰ってから一カ月過ぎた時、仲間たちは次々と小屋を去る。一人残ったカルメンは、虚しくホセを想い、

酒を飲んで眠っていた。そこに昔のカルメンの知り合いの男がやって来る。街に戻っているカルメンのところに、脱獄中のホセが現れるが、カルメンの心はもう離れてしまった。落ちぶれた今の自分と観衆から声援を受けるカルメンの新しい男。カルメンから断られたまらなくなったホセはナイフでカルメンの胸を刺す。

1. セビリアの街 広場 (昼)

工場の出口、行きかう人々、兵士たちが詰所の壁に寄り掛かっている。

兵士1 「ああ、交替の時間までもう少しだな。詰所の戸口のところで時間つぶしに、煙草でも吸うか」

兵士2 「これでも俺あ、自由のために志願して兵士になったんだぜ。それが毎日、労働者が喧嘩しないよう見張るのが仕事だなんて、犬かよってんだ。」

兵士3 「何か知らねえが、ともかく暴動を起こさねえようにみはってろっていうけど、いざこざが嫌なら、わざわざジプシーなんか雇わなきゃいいのにな。」

兵士1 「安くこき使っても誰も文句言わねえってやつらだからさ。」

兵士2 「それでも、そういう弱い者のために働いてえと思っていたよ。今は、交代時間が待ち遠しいばかりだ。」

兵士3 「俺あ嫌じゃねえぜ。死ぬか生きるかの革命につき合わされるのなんかもうたくさんだ。それにしても、ここの女たちときたら、酒場の女みたいな服を着ているなあ。亭主が門の前まで迎えに来るのもよくわかるぜ。」

兵士4 「へっ違うんだよ、亭主らは酒代せびりに来てるんだよ。工場が終わったら酒場で働かせてるんだ。集まっちゃあ女の取り合いじゃなけりゃ賭け事さ。」

兵士2 「俺たちだったら女を酒場で働かせたるようなことはない。」

兵士4 「うちの母ちゃんみたいな相手に酒飲んでもつまらんからな。」

兵士3 「遊び相手ならジプシーの女が気楽でいいよな。金に困ってるから僅かな金でもなびくって本当か」

兵士1 「おい、大尉殿がやってくる。整列だ。」
(胸のボタンを締めて立ち上がり、一列に並ぶ)
(ホセと大尉がやってくる。)

ホセ 「大尉殿こちらでございます」

大尉 「ほう、この辺りがその、煙草工場か」

ホセ 「はい。この工場の出入口は、最もいざこざが多い場所でしたが、ここに詰所を置いてからは改善しています」

大尉 「それは結構」

(兵士たち、大尉に敬礼)

喧嘩だ、喧嘩だの声

ホセ 「なんだあれは。」

兵士2 「喧嘩です伍長殿」

ホセ 「女の喧嘩か」

大尉 「ほう、これが。話には聞いていたが、この辺りの女は見た目も美しいが気性も荒いらしいね」

ホセ 「申し訳ございません大尉。ご就任早々お見苦しいものをお見せして」

(人垣が左右に別れ、二人の女がもみ合っている)

マヌエリータ 「よくもやったわね」

(マヌエリータは立ち上がり、突き飛ばしたカルメンに向かっていく)

カルメン 「あんたの男が勝手にあたしに入れあげてるのよ」

マヌエリータ 「あんたがそうさせたくせに」

カルメン 「あんたの男が勘違いしてるのさ。言ってやって、カルメンは迷惑しているってさ。」

マヌエリータ 「まだ言うの」

(マヌエリータ再びつかみかかり、男たちは口笛を吹いてはやし立てる。)

(ホセ、素早く二人の間に割って入る。殴りかかるマヌエリータをモラレスが抑える。)

ホセ 「止めろ」

カルメン 「いったいあたしが何をしたっていうの」

マヌエリータ 「人の恋人をとったのよ」

カルメン 「あんたに夢中だったら他には行かないでしょうに」

マヌエリータ 「あたしがあの男のためにどんなに苦勞しているか」

カルメン 「そんなのはあたしの知ったこっちゃないわ」

マヌエリータ 「ちょっと顔形がいいからってそんなこと平気で言うところが許せないのよ。あたしはね、あんたみたいに酒場なんかで働くような女じゃありませんからね。なのにあの人は」

カルメン 「まあまあ、ジプシーは自由。選ぶのは男の権利だわ。あたしにも選ぶ権利があるけど」

マヌエリータ 「ちくしょうあの女！どこまで人を馬鹿にすれば気が済むの？」

(マヌエリータ、兵士の手を振り払って、カルメンに再び掴みかかろうとする。はやし立てる群衆。ホセが、二人の間に割って入る。)

ホセ 「止めないなら、二人とも逮捕だ！この女たちがブタ箱入れられて食いはぐれる奴は何処だ！出て来るなら今のうちだぞ」

(男が出てくる)

ホセ (男に) 「自分で始末をつける。出来ないなら俺たちがやる。」

男 「もう止そう。カルメンの言う通りさ。俺は相手にされてないんだ。」

マヌエリータ 「あたしは騙されない。騙されないよ。あんた今まで何処に居たのよ。」

男 「借金取りに追われて逃げてただけだ。
女なんかいない。それどころじゃないんだ今の俺は。」
(男、わっと泣き出すマヌエリータの肩を抱いて去る)

群衆 「ブラボー ホセ！ブラボー 」

女たち 「さすがホセ様だわ！」

カルメン 「しっかり見張ってくださいな、伍長さん。いいがかりで喧嘩売られてたら命がいくつあっても足りないわ」

モラレス 「おいカルメン、お礼のひとつも言えないのか」

ホセ 「これからは売られても買わないようにすることだな」
(カルメン、ホセを上から下まで威圧するように見つめ、花を投げつけ去る)

2.

パスティアの店

大尉、ホセ、モラレス、パスティアの店の前

パスティアの店の中

が座っている。二人のボヘミアンがギターをかき鳴らす。
カシアの花を口に加えた1人の女がフラメンコを踊り、歌う。

パスティア 「いかがです大尉。これがボヘミアンの歌と踊りですよ」

大尉 「うん。気に入ったぞ。わざわざ、ボヘミアンの地区に赴任させてもらった甲斐があるというものだ。これから毎晩来るぞ」

バイオリンがけたたましく鳴る、

パスティア 「さあ、さあ、大尉様をダンスにお誘いして」

(ダンスに誘われて立つ大尉)

モラレス 「毎日来るんだってよ」

ホセ 「こういう場はお前の方が得意だ」

モラレス 「じゃあ俺の方が先に出世しても文句言うなよ」

ホセ 「言わないさ。俺はアメリカに渡るつもりだから」

モラレス 「チェッまたその話かよ」

ホセ 「お前こそ、この国にまだ何の未練があるっていうんだ」

モラレス 「あるさ、好きな女もいる」

ホセ 「女なんかで未来を決められるなんてな」

モラレス 「お前みたいに女で苦勞したことの無い奴には分かりやしないさ」

ホセ 「俺は全然未練なんかないんだ。軍隊にも。この国にも。」

モラレス 「愛国心がないや軍で働いていけないってのかい？大尉
を見てみる。どんな地位にあらうと人生は楽しまなくて
は。あんな風になりたいもんだ。」

ホセ 「大尉は元々が貴族だ。俺たちとは違うさ」

モラレス 「ああ、お前と話していると気が滅入る。そりゃあ、お
前くらい色男なら、金を出してくれる金持ちの女がいて
もおかしくない」

ホセ 「俺は女の世話になるのなんかごめんだな」

モラレス 「固いこと言わなくていいぜ。誰にだってできることじ
ゃない」

ホセ 「お前酔ってるな。俺は先に帰るよ」

モラレス 「ああ、帰ればいいさ。」

(店を出るホセ、出口の傍にカルメンが立っている)

カルメン 「ねえ、あたしのこと覚えてる？」

ホセ 「あの喧嘩の女か」

カルメン 「あの時のお礼に、あなたを占ってあげるわ」

ホセ 「別にお礼なんていらんよ。占いもいらん」

カルメン 「ちょっと。あんた、私が面倒な女だから関わりたくな
いってこと？」

ホセ 「知ってるかい、そういう女のヒステリーこそが不幸せ
を呼んでるんだ」

カルメン 「それは失礼しました兵隊さん。私の周りの人たちはい
つもそういう目で私をみるものだから」

ホセ 「残念だね」

カルメン 「あたしらみたいなのは、相手が自分の男であってもな
くっても、いつも棘をたてて用心する習慣なんです
よ。」

ホセ 「ろくでなしばかり相手にしてるからなんだろうな」

カルメン 「そうなんですよ。もう悔しい、悲しい思いをするのは
こりごりなんです」

ホセ 「それで片っ端から男を変えるんだろう」

カルメン 「あたしがボヘミアンだからって、同じ人間だってみよ
うとしないんですね」

ホセ 「それはそうだ。俺たちとは随分違う。男っていうのは
命がけで女を守るものさ。だから女は男を敬って、不機
嫌を撒き散らさなくってもいいんだ」

カルメン 「ああ兵隊さん。本当にそんな男がいるものなら。あた
しだってね、つかみ合いの喧嘩しょっちゅう吹っ掛けら
れてばかりいるのは嫌なのよ」

ホセ 「無理だな。お前の顔が醜くでもならない限り」

カルメン 「言ったでしょ。あたしはむしり取られる前に、むしり
取る女なの」

ホセ 「いつか会えるさ、そんな心配しなくて済む男に。こん
なうらぶれた酒場でなんか探そうとしないことだ」

カルメン 「あなたは見つけたの？あなたを敬う女に」

ホセ 「俺だってまだ、そんな女が居ればいいなと思っている
ところだよ」

カルメン 「ハハハハ、あんたのお友達のもラレスは、あたしがあ
んたに気があるんじゃないかって心配してるわ。嫉妬な
のよ。別にあたしを自分のものにしたいと思ってるわけ
でもないくせに、心の隅に焼き付いて仕方ない。ハハハ
可笑的い」

ホセ 「えらい自惚れだな。残念だったな。あいつにはもう大
切な女がいるんだ」

カルメン 「フフフフフ…そうかしら。大切な人がいたっていなく
たって関係ないわ。決して自分に振り向くはずもない人
に心を求めて恥をかかないために、大切な人とやらを決

めたがるのよ。あたし分かるの。最初の一瞥で。この人はあたしに惹かれてるのかどうかってことが」

ホセ

「…自惚れもそこまでいくと重症だな」

カルメン

「忘れちゃ困るわ。あたしらは、あんたたちとは違う。私らジプシーは旅から旅、鳥のように自由なの。空飛ぶ鳥だから、自分の行く先にいいものがあるか悪いものがあるか、一瞬で嗅ぎ分けることが出来るのよ。」

ホセ

「違うことなんかあるもんか。自分たちだけが特別だなんて大きな間違いだ」

カルメン

「勝手にそう思っていればいいわ。だけどあたしたちは縛られない、人を縛らない自由な鳥なの」

ホセ

「そんなことを言っているからいつまでたっても君らは、安い賃金でこき使われるんだ。夫だって妻を縛れないから酒場をほっつき歩いて家に帰りもしない。泣くのは結局女だろ。俺たち兵士は軍人として喜んで縛られている。女だって好きな男には喜んで縛られる。それが人間ってものさ」

カルメン

「フフフ。それでもあたしたちは特別だわ。 そんな運命しか与えられていない代わりにね、未来を知ることが出来るの。

…あなたは故郷の女の子とは結婚しないことは分かるわ。親の決めた婚約者がいるんでしょ。」

ホセ

「何故お前にそんなことがわかるのだ」

カルメン

「一目見た瞬間に他の選択なんて消えてしまうくらいの恋でなければ、人生を任せることなんてできないのよ。焼け付くような恋があれば新しい世界が開けるわ。身分が違ってても」

ホセ

「確かにお前の言う通りだ。俺はあいつに恋してはいないのだろう」

カルメン 「いい人ねあなた。あたしに未来を占ってほしくな
た？ 明日この店で待ってるわ。」

ホセ 「悪いが、そんな暇は無いんだ」

カルメン 「構わないわ。この街から犯罪が一件も無くなるまでだ
って待つわ」(ショールを肩にかけ、意味ありげな微笑
みを投げ去る)

ホセ 「俺は占いなど信じるような男じゃない。ましてジプシ
ー占いなど信じる訳がないが」

カルメン 「フフフ」

3.

隠れ処

レメンダッド (辺りを見まわして) 「ボスは来てねえよな。同じ酒場
でばったり会っちゃったらシャレにならねえ」

ランカイエ 「構うもんかよ。面倒な仕事は全部俺たちがやってん
だ、仕事が終わったらまっすぐ酒場で飲むのが昔っから
の習慣さ。山小屋にこもってるだなんて台の男が台無し
だぜ」

レメンダッド 「仕方ねえさ。あいつが居た方がずっと仕事が楽だ。拳
銃の腕だって俺らよりずっと上さ。」

ランカイエ 「あのな。楽になったって、楽になったのは女どもだけ
じゃねえか。女たちに監視の気を引かせときゃいいもの
を、それをやらせねえから俺たちが厄介なんだ。全く何
だってカルメンはあんな奴を俺たちの仲間に入れた
んだ」

レメンダッド 「そりゃあ、女たちを甘やかすためだろう。まあ稼ぎが
いいうちは文句は言えねえ」

ランカイエ 「いくら稼ぎが良くなったって分け前が増えるわけじゃ
ねえしよ。俺はあいつが来る前の方がよかったがな。」

(モラレス、姿を現す)

モラレス 「おい、お前たち。カルメンの仲間だろ」

ランカイエ 「モラレスじゃねえか」

レメンダッド 「ちきしょう。捕まえに来たのか」

モラレス 「そうじゃねえ。俺はもう軍隊を辞めたんだ。お前たち
を逮捕しにわざわざここまで来たりしねえ。おれの古い
友達を探してるんだ」

ランカイエ 「なんだホセなら…」

レメンダッド 「待て。信用できねえ」

モラレス 「話をしたらすぐに帰るさ。あいつの家族からの知らせ
があつてな」

(モラレス、金貨を渡す)

レメンダッド 「まあいい。着いてきな」

ランカイエ (小声で) 「おい、いいのか？」

レメンダッド 「大丈夫さ。あいつに連れはいいない。上手くすれば、あ
いつがホセの野郎を街に連れて帰ってくれるかもしれね
え。」

ランカイエ 「そういうことかい」

レメンダッド 「隠れ処迄は来させねえ。丘のところまで連れてくか
ら、おめえ、ホセの奴を呼んでこい」

モラレス 「へい、親分。心配するな。俺はもう退職したんだ」

ホセ 「久しぶりだな。よく来たな」

モラレス 「兵隊をやめてアメリカに行くことにしたよ」

ホセ 「何だって兵士を辞めちまったんだ？」

モラレス 「煙草工場の労働者の見張りなんかもうそれどころじゃあない。ここのとこあっちでもこっちでも諍いだらけだ。戦争が始まれば前線に送られるのは目に見えてるからな。とうとう決心したよ」

ホセ 「相変わらずだな。俺がお前でもそうするだろう」

モラレス 「大義名分なんてうんざりだ。自由のための戦いなんて嘘っぱちさ。法律なんてえのは、貧しい奴をもっと貧しくするだけなのさ。
こんなご時世だ。お前みたいに盗賊になるのも悪くねえかもしれねえな。」

ホセ 「盗賊じゃねえ。運び屋だ」

モラレス 「あの女の仲間と一緒にいるのか？」

ホセ 「ああ」

モラレス 「もうアメリカに行くのは止めたのか」

ホセ 「俺の首には賞金がかかってるんだ。身を隠して生きてくしかないのさ。放っておいてくれ」

モラレス 「だから誘いに來たんだ。お前が女のせいで道を外れちまったのは仕方がないが、あっちに行けばもういちどやり直すことも出来るだろう」

ホセ 「考えたさ。言われなくたって。考えたさ。」

モラレス 「女のことなど初めから考えるな。逃げ回ってちゃ、まともに暮らせるわけない。それとも目先のことしか考えられない奴らと同化しちまったか？」

ホセ 「ああ、そうかもしれん」

モラレス 「正気じゃないなお前。そこまで自分で自分をあの女に縛り付けているとは」

ホセ 「ああ、その通りだよ。あいつは、」

モラレス 「どうしちまったんだお前。もっと現実をみろ、兵士を辞めてお尋ね者になって、お前ばかりが犠牲を払っているんだ。今はまだ、金があるからくっついてくるのかもしれないねえが、金の切れ目はな。縁の切れ目だ。本当の血の繋がりとは違う」

ホセ 「あいつはそういう女なんだ。自分の運命を嘆いてみせて、関わらないでいられなくするんだ。分かったところでな。ここまで犠牲にしたのに、ここで引き下がるわけにはいかないんだ」

モラレス 「実はな、お前の妹だっていう娘が俺に会いに来た。お前の母さんがもうもたないそうだ」

ホセ 「ミカエラか」

モラレス 「お前の家はあのあたりだろ。山を降りて帰って来いよ」

ホセ 「村中の奴らが眼の色変えて待ってるよ。俺の親戚は信用ならねえ奴らだ。ミカエラは何にも知らない、周りの奴らに勧められるがまま、俺を探し回ってるだけだ」

モラレス 「お前に帰りたい気持ちがあるなら、子分に様子を見にいかせるぐらいは出来るはずだろが・・・カルメンがさせないのか」

ホセ 「あいつは僻みっぽい女だ。俺に母親がいることすら許せないだろう」

モラレス 「いかれてるな。アメリカに行けないのも、親の死に目に会いに行かないのもカルメンのせいかな」

ホセ 「いかれてるのは俺さ」

モラレス 「分かってて何故だ。だから言わんこっちゃない。やっぱり俺たちとは違う人種だろ」

ホセ	「だからなんだ。少しでも離れたなら俺たちはお仕舞なんだ」
モラレス	「お仕舞にしておけ。お前って奴は元々、あんな女に関わるべきじゃなかったんだ」
ホセ	「それだけでもないんだ。ブツを山ほど背負い込んだんだ。さばけるまではこのアジトから離れられないだけだ。」
モラレス	「子分たちに任せられないのか」
ホセ	「ああ、任せられない」
モラレス	「哀れな奴だ」
ホセ	(モラレスを抱擁して) ありがとうよ。お前は俺の本当の友達だ。
モラレス	「俺は伝えることは伝えたぜ。後で後悔するなよ」
ホセ	「ははは。ありがとうよ。ブツが裁けたら分け前を分けて、俺もカルメンと一緒にアメリカに行くんだ。」(虚ろにはほほ笑んで、片手を上げ、二人は手と手を打ち合わせる)
モラレス	「あいつは知らない土地へ行くような女には見えないがな。自分の良く知った土地で女王でいたい女だ」
ホセ	「そうでもないさ」

4.

盗賊のアジト

中央にテーブル、メルセデスとフラスキータがトランプをしている。カルメンは酒を飲みながらそれを眺めている。

フラスキータ 「真中に3枚、V字型に7枚。

新しい出会いがあるみたい。ハンサムなお金持ち、どうしよう」

メルセデス 「そんなことより、あたしたちいつこの山を降りられるか占おうよ。

中央に3枚、V字型に7枚。

もうすぐ降りられるわ。だけど新しい男が来る。別離のカード、ずっと続くみたい」

カルメン 「もういいよ。やめて。やらない。あたしは自由よ。カードに未来なんて決められたくない」

メルセデス 「いったいどうしたんだよカルメン。塞ぎこんでてあんたらしくないよ。

逆位置のエンペラー。何をしても何処に行ってもこれずっとついてくるんじゃ、もう占いようがないわよね。」

フラスキータ 「あたしら金になるんだったら、どんな男だって手なずけるぐらいどうってことないけど、あんたのエンペラーは、それをダメだって言うんだ」

メルセデス 「あいつさ、あたしらに、こんな仕事辞めて、街の煙草工場で朝から晩まで働けばいいなんて言うくらいだ。あたしは嫌だよ、そんな未来」

カルメン 「あたしが占ってあげるよ。

ほら、もう少しであたしたち街に降りられる。皆、金持ちになれるよ。だけど…」

メルセデス 「だけど何？」

カルメン 「何でもない。もう占いは止めた。いつここから出られるかって、もう何回占っているっていうんだい。何度占っても同じに決まってるじゃないか」

フラスキータ 「早く街に戻れたらいいのに」

メルセデス 「悪いけどカルメン。あたしのカードには、帰れるけど分かれ分かれになるって出てるよ。

カルメン 「そんなの気にしないよ。あたしら家族だろ」

メルセデス 「だけどね、ホセは違うよ。何から何まで違うんだ。確かにガルシアの後釜になれる奴は他に居なかった。ホセのおかげでもっと稼げるようになったし、身の危険も減ったさ。だけどね、どんなに仲間になろうたってやっぱりあいつはよそ者なんだ」

カルメン 「分かってるわメルセデス。ホセだってね、そう思ってるのよ」

メルセデス 「それであんたはどうするの？」

カルメン 「あたし、ちょっと散歩してくる。

(独白) 本当にどうかしてる。このあたしが先のことを心配するだなんて。けどもうカードを見る気にもならないんだ。これまであたしのカードは外れたことなんか無い。」

レメンダッド 「おい、カルメン、ホセのやつは俺たちの仲間のフリしてるが、秘密ばかりだ。昔の軍人仲間と会ってたんだぜ。何故奴がここにアジトを作ったと思う。この麓の村はな、ホセの故郷なんだぜ」

ランカイエ 「母ちゃんが病気だから見舞いに行くよう誘ってたぜ」

カルメン 「で、ホセは何て言ったんだい？」

ランカイエ 「行かねえんだって。おめえに気兼ねして」

カルメン 「分かった。ホセとはあたしが話つけるから二人にしておくれ」

レメンダッド 「だから前から言ってるじゃねえか。あんな奴仲間に入れるのは止めて俺たちだけでやろうぜって」

カルメン 「いいからホセと二人で話させておくれよ」

(ランカイエ、レメンダッド、中に入る。反対側からホセが歩いてくる)

カルメン、銃を出してかまえ、ホセの頭に向ける。

ホセ 「何事だ」

カルメン 「あんた、行く時が来たよ」

ホセ 「追い出そうっていうのか」

カルメン 「さあ早く、あんたは一人でこの山を降りるんだ」

ホセ 「いったい何を言っているんだ」

カルメン 「あたしは知ってるよ」

ホセ 「モラレスが会いに来たんだ。軍人を辞めたんだ。アメリカと一緒に行かないかって。行かないって言ったさ。俺はお前と一緒にできや行かない」

カルメン 「それだけかい？」

ホセ 「ああそれだけさ」

カルメン 「さあ、行かないと本当にぶっ放すよ。丘の下に母さんの家があるんだろう」

ホセ 「ああ、それがどうした」

カルメン 「親が病気で死にそうでも、まさかあたしに気兼ねして見舞いに行かないだなんて言わないで欲しいね」

ホセ 「兵舎へ帰るといえば軍隊とあたしとどっちが大事かと言うから、盗賊になった。今度は捕まりに行けっていうのか」

俺の首には賞金がかかっているんだ。母親が死ぬだなんて言われたって簡単に信じるものかよ。この山を降りて行けば捕まるかもしれない。それでも行けっていうのか。いいからもう、銃を降ろせよ」

カルメン 「一度向けた銃をあたしは降ろしはしないよ。あんたいつも麓の方を見つめて溜息ついていたじゃないか。母さんに会いに行きたいなら行きなよ。今すぐ行きなよ。実の親がいるくせに居ないふりするんじゃないよ」

ホセ 「ヤマがおわったら山を降りる。街に戻る。皆一緒だ。心配するな」

カルメン 「あたしには分かるんだよ。あんたは今、行った方がいい。でもあんたには自分の故郷がある。家があるんだろう。あたしが、あんたの母さんだったらさ、もう死ぬかもしれないならさ、一目会いたいよ。どんな危険があつたって会わないわけにはいかないよ」

ホセ 「もういい、お前は、そういう言い方をすれば俺が山を降りるとでも思ってるんだ。俺が居ない間に、ブツを持って逃げるつもりだろう」

カルメン 「もうあんたはずっと、あたしにそういう態度だ。そういうだろうと思って、今じゃ滅多なことじゃあたしは先の話はしない、あたしらが武器を集めて武器を売って、ここまで金持ちになれたのはあんたの力さ。占いじゃない。でも、今夜は言うよ。行かないともう、あんた母さんに会えないんだよ」

ホセ 「それがどうした。これだから女ってのは分からねえ」

カルメン 「あのカルメンがさ、今じゃ酒場にも顔を出さず、あんたの帰りを待つだけのただの女さ。あんたの言う通りジブシーのどんな男を恋人にしてもこんなことあり得なかったよ。あんたに会えてよかったんだ。あんたとずっと一緒にいたいんだよ。だから、あんたの母さんの死に目にだけは会ってよ。あたしのせいで、たった一人の母親の死に目に会えなかっただなんてことにしないで」

ホセ 「ああ、カルメン。俺がいない間もその言葉が変わらな
いと伝えてくれ」

カルメン 「変わらないよ…あたし待ってるよ…」

ホセ 「一晩だけだ。一晩だけ行って戻って来よう。俺にもしものことがあった時のために、この鍵を、お前に預けておこう。これは俺の全てだ」

ホセ、カルメンを強く抱きしめ、出て行く。

(馬の蹄の音)

ランカイエ 「悪いなカルメン。もう一カ月だ。俺はここを出るぜ。これ以上待てねえ。」

レメンダッド 「俺もだカルメン。俺は前みてえに自由にやりてえ。軍人みたいに使われるのは、元々性に合わねえし」

カルメン 「あたしの大事な兄弟たち。ホセは必ず戻って来るよ」

レメンダッド 「この機会を待ってたんだ。戻って来ようと来まいと知ったこっちやねえ」

フラスキータ 「どうしてなの？あたしたちずっと一緒にやってきたじゃないか。家族みたいにさあ」

メルセデス 「あんたたちが出ていったらあたしたちはどうなるのさあ。なんで待てないんだよお。」

ランカイエ 「俺はもう十分だよ。危険なヤマはもう嫌だ」

カルメン 「出て行きたいならいけばいいさ」

レメンダッド 「そう来なくっちゃ。分かってるだろカルメン、俺たち丸腰じゃ出て行けねえ。俺たちの分け前をもらいたいんだが」

カルメン (鍵を投げ) 「好きなだけ取ればいいだろう。何処へでも行ってショボくやりゃあいいだろう。しばらくして金が無くなってもあたしは知らないよ」

フラスキータ 「ねえカルメン、あたしらも行こうよ。街が恋しいよ」

メルセデス 「あいつとはちょうど潮時だったのさ。本当に捕まっちゃまったのかもしれない。それならヤマどころじゃないよ。確かにちょっとあたしらのこと大切にしてくれたかもしれないけど、やっぱり元々から違うんだ」

カルメン 「いいよ。放っておいて。あたしはもう、戻って来なくても待ってるって約束したんだ」

(カルメングラスに酒を注ぎ手に持つ。)

メルセデス、フラスキータに耳打ち、フラスキータ頷く。

メルセデス 「カルメン、悪いようにはしないよ。好きなだけここで待ってればいいさ。あたしに任しときな。しばらくの辛抱だからね」

カルメン 「いいよ慰めなんかいらぬ。あんたらの男が行くんならあんたらも行かぬやならないよ。当たり前じゃないか」

フラスキータ 「ごめんよカルメン」

カルメン 「あたしのことは大丈夫だって」

(メルセデス、フラスキータ、カルメンと抱擁し別れを告げる)

扉が閉まる。

カルメン 「あいつは口だけの男じゃないよ。あいつはあたしに約束したんだ。あたしの大切な仲間たちの面倒を全部見なくて。あたしたちを金持ちにしてくれるって。それがあたしへの愛の証だって、言ったんだ。だから勘弁してやろうよ、あたしたちを変えようとするの。言葉で傷つけてあたしの気力も何も失わせてしまうことも。だって地位も家族も捨てて、あたしたちのために精一杯やってるんだからさ。

凄いだろ、偉いだろ、あたしの男。一緒に歌っても踊ってもくれない奴だけど、でもあたしの男だって決めたんだ。

分かったよ。何度占っても、何度占っても、死のカードが出る意味が。カルメンは、ジプシーのカルメンは死んだんだね。自由気ままに生きるカルメンは死んだんだ。もう、カードはあたしの見方をしてくれない。人の運命どころか自分の運命さえ分からなくなっちゃった。

ああ、ホセ、あたしの全てを持って行ってしまった。もうあたしはあんたの帰りを待つしかないのかい。一度、愛したら愛し抜くのだってあたしの自由よ。憎いのに、憎いでも恋しい」

(酔って、呟きながら床に眠り入ってしまうカルメン。)

扉が開き、ホセではない男が入って来て、カルメンを抱き起こす。

男

「私はずっと前からあなたを知っている。あなたの古い友人です。あなたは真っ赤な花を口に加えて踊っていた。煌びやかで自信に満ちて、何もかも見透かしたような眼差し。自由で、決してとらえておくことの出来ない人。どんな男が言い寄っても、決して捕らえられることなどありはしない。

そんなあなたが、すっかり変わってしまったと聞いては、いてもたっても居られず迎えに来ました。

あなたが再び自由な美しい羽根を広げられるよう、わたしはあなたに仕えましょう。わたしはあなたが目を覚ますまであなたの傍にいきましょう。あなたが目を覚ましたなら、馬の背に乗せて、朝もやの中を懐かしい街へとお連れしましょう。わたしを愛してくれてもくれなくても、あなた次第でかまいませんから。

ああ、カルメン、わたしのカルメン」

5.

闘牛場の門の前広場

闘牛士のパレード、エスカミーリョがカルメンの肩を抱き、群衆の中を歩く。

カルメン

「さあ、行って。

あたしはここであんたの勝利を待ってるわ」

エスカミーリョ 「セルビア一の闘牛士エスカミーリョは、今日もあなたに勝利を捧げます」

カルメン (曖昧にほほ笑んで) 「古いあたしの友達。あの時あんたがあたしをあそこから連れ出してくれなかったらどうなっていたらうって思うよ」

エスカミーリョ 「何よりもあなたが元気になっていくのを見ると嬉しい。きっと勝ちますよ。どんなにわたしがファンに囲まれても、どうか勝手に一人で帰ってしまったりしないで」

カルメン 「しないわ。傍にいるわ」

(エスカミーリョ恭しくカルメンの手に口づけし、闘牛場に入っていく)

ホセが立っている。

カルメン 「ホセ」

ホセ 「驚いたか。久しぶりだな カルメン。俺は必ず戻って来ると言った。俺は嘘をつかない」

カルメン 「捕まったんだろ。逃げてきたのかい？」

ホセ 「お前の言う通り、母さんは俺を待っていたみたいに息を引き取ったよ。その後捕まっちゃった」

カルメン 「ねえ、こんなところに居ない方がいいよ」

ホセ 「仲間は？」

カルメン 「ブツのこと聞きたいの？もうないよ、自分の分け前だっていって、分捕るだけ分捕って、皆どっかへ行っちゃったよ。もう何も残ってないさ。あんたが居なくなった途端にバラバラだよ」

ホセ 「あいつらはバラバラでもいい。俺にはお前さえいれば」

カルメン 「ねえ、あたしには市長に顔が利く友達がいるんだ。あ
んたを自由にしてもらえるよう頼んでもらうよ」

ホセ 「そんな必要はない。俺はこのままお前を連れてすぐに
アメリカへ渡るんだ」

カルメン 「あたしは行かない」

ホセ 「頼む。二人でいるためには他に方法がないんだ」

カルメン 「やっぱりあたしとあんたは違うんだ」

ホセ 「違うって何なんだよ。
お前のために、人を殺した。お尋ね者にもなった。もう
後には戻れないんだ。引きずってでも連れて行く」

カルメン 「縛られるのは好きじゃないわ」

ホセ 「今更何を言ってるんだ。ずっと愛しているんじゃないか
ったのか」

カルメン 「そんなこと言ったこともあったわね」

ホセ 「市長に顔の利く友達って奴が新しい男か」

カルメン 「昔の友達よ。あんたには関係ないわ」

ホセ 「じゃあ俺がお前のためにしてきたことは、一体何だっ
たんだ」

カルメン 「あんたのやったことはあんたが山を降りた時全部きえ
ちまったんだよ。
あたしがあんたに狂ってたせいで、あたしは大事な仲間
を、あたしの家族をバラバラにしちまったんだ。あたし
には家族だったのに、あんたのせいでバラバラになっ
ちまったんだ」

ホセ 「お前が待っているというから山を降りたんじゃない
か？ 檻に入ってたただけだ、俺が、この俺が何のために罪
人にまでなっただと思ってるんだ！」

(歓声 勝利だ勝利だ！ エスカミーリョ！ エスカミーリョ！)

ホセ 「あいつなんだな」

カルメン 「あんたには関係ないわ」

ホセ 「あいつは何でも持っていて俺は何も持っていないとい
うのか」

カルメン 「言ってるのはあたしじゃない。あんただわ」

ホセ 「俺は牢屋の中でお前のことばかり思っていた。」

カルメン 「いい気なものね。あたしだって何度も出入りしてるか
ら知ってるわ。牢屋の中っていうのはそういうところ
よ。」

ホセ 「死ぬほどの思いをして探したんだ」

カルメン 「フン。大切なものを失ったのはあなただけ？」

ホセ 「お前の仲間のことはもういい。お前だけいればい
い。」

カルメン 「行かないよ」

ホセ 「今はあいつの方が俺より勝ってるかもしれないが、俺
だってこのままでいやしない。信じてくれ」

観衆の声 「エスカミーリョ！」 エスカミーリョ！

カルメン 「今日も勝ったのね。きっとあたしを探してる」

ホセ 「奴の血は砂を染めていないのか。俺が息の音を止めて
やる」

カルメン 「やるならやってみな。あたしはもうあんたのものじゃ
あない。こんなもの返すよ！（指輪を抜いてホセに投げ
つける）変わらないね。どいてよ。」

ホセ 「あいつのところになんか行かせない」

カルメン 「行かなきゃ。闘牛が終わったら一緒に酒場で祝杯をあ
げるの。あの人は大勢の取り巻きの前で、あたしに一番
速い曲を踊ってくれて必ずいうのよ」

ホセ 「浮気女。俺は何て運がわるい。真実なんて無かったんだ。うまく俺を利用しやがって。俺がそんなに間抜けだっ
て言いたいのか。お前に、お前の真心があると思って
いた。人がお前を悪く言おうと何だろうと、俺だけが
お前を理解してると思ってた、いや思わされて、とんでも
ない魔女だお前は！」

カルメン 「あの人は、勝てば勝つほど、周りから賛美を受ければ
受けるほど、不安でたまらなくなって、あたしを探す
の。だからあたしはいつもあいつの勝利を願ってる。そ
れだけよ。」

ホセ 「保安官から盗賊になったのはお前のためじゃないか。
お前が大事にしてるっていうからお前の仲間も皆金持ち
になれるようにしてきたのに。」

「止まれ、止まれカルメン」

(フラメンコのギター之音、闘牛場のファンファーレ)

(ナイフの奪い合いの末、カルメンはぱったりと倒れ
る。胸元に死神のカード、息絶える。)

闘牛場の門が開き、人々が集まってくる。

(F・O)

(終わり)